

軍 事 史 学

第 57 卷 第 1 号

卷 頭 言

脱走したポーランド人捕虜を憶う

稲葉千晴

ポーツマス講和条約が批准された一九〇五年十月半ば以降、国内二九カ所の捕虜收容所から七万二千人のロシア兵が本国に送還された。一八九九年に締結されたハーグ陸戦条約の俘虜規定第二〇条「平和克復ノ後ハ成ルヘク速ニ俘虜ヲ其ノ本国ニ帰還セシムヘシ」を日本政府が順守した結果である。ロシア帝国で無理やり徴兵されたポーランド人の一部は、日露戦争で戦うのを拒み満洲で日本軍に投降した。松山の捕虜收容所では裏切り者としてロシア人将兵から虐待を受け、ロシアに送還されれば軍法会議で厳罰に処せられる。ポーランド人数十人が批准直後に收容所を脱走して、各地のカトリック教会の手引きでカナダに渡航した。日本政府が彼らの海外逃亡を黙認したのは、言うまでもない。

一九三九年九月下旬、ソ連との戦闘から逃れたポーランド将兵一万四千人が中立国リトアニアに抑留された。同国政府は「捕虜」の送還を独ソに求められて、受け入れざるをえなかった。だが従順に従ったわけではない。三千人ほどが收容所から脱走するのを黙認している。百数十人が身分を偽り、スウェーデン経由でフランスのポーランド亡命政権と合流した。ある者はフィンランドに渡り、冬戦争でソ連へのリベンジを誓う。情報士官二名は在リトアニア領事の杉原千畝から満洲国パスポートをもらい、ドイツに潜入した。

一九四一年七月、独ソ戦で窮地に立たされたソ連は、敵対するポーランド亡命政権と英米の仲介で和解した。政権はソ連に抑留中のポーランド人捕虜二五万人の解放を求める。だが解放は遅々としてすすまない。士官が行方不明だと亡命政権が抗議すると、「士官は満洲に逃亡した」とスターリンはうそぶく。実は四〇年三月、ポーランド士官二万人以上が、ベラルーシのカティンの森で密かに銃殺されていた。はたして何人のポーランド人捕虜が、満洲で関東軍の庇護下に置かれたのだろうか。

「敵（ロシア）の敵（日本）は味方」と念ずるポーランドは、戦間期に日本と対ソ軍事協力を結び、今日欧州屈指の親日国となった。大国のはざままで翻弄されて、歴史の暗闇に消えたポーランド人捕虜の無事を祈ってやまない。

（名城大学）